

# コロナ禍による現実の一端

三十九日間の夏休みが終了しました。この夏休みを一言で言い表すとしたら、どんな夏休みだったと言うことができるでしょうか。「夏休みは二期につながる」ということを前回の「校長室より」の中にも書きましたが、その準備・心構えができた夏休みとなったことを期待しています。

私は、昨年度までと変わらず、極力外出を避け、外出する際は一人での行動を意識して過ごしました。そのため、学校に行かない時は、草刈りや環境整備など、日頃はなかなかできない家事を行うことができました。また、本を読むことも日常ではなかなかできていませんでしたので、この夏は意識して読み、十五冊読破することができました。心の栄養とすることができたような気がしています。

さて、標題に「コロナ禍による現実の一端」としたのは、ある光景を目撃したことからです。大学時の同級生の父親のご不幸の報を受け、お悔やみを伝えるために、名古屋までの中央線に乗っていた車中でのことです。本当は車で向かいたかったところですが、目的地が三重県の南部でしたので、公共交通機関をやむなく利用しました。

瑞浪駅から乗り込んだ車内は、座席にまだ十分にゆとりがあり、出入口に近い所に座ることができました。土岐市、多治見市と過ぎ、ある程度の乗車がありました。まだ立っている人はいない状況でした。

高蔵寺駅に停車した時のことです。何名かの乗車客の中にマスクをしていない一人の若い女性の姿がありました。見る限り全員がマスクを着用している中なので、マスクをしていない姿は目を引きました。その女性は、私の座っている横長のシートから二つ離れたシートの空いている席に座ろうとしました。その時のことです。まだ座席が一杯の状況ではなく、隣り合って座らなくても良かったので、女性が座ろうとした席の左右は一、二名分空いていました。座ろうとした時、一、二名分空いていた隣の乗車客が席を立ちました。続いて反対側の乗車客も席を立ち、他のシートに移動しました。それによって、女性客の左右二、三名分が空席になったのです。その女性客は表情を変えることなく、携帯に目を落としていました。その後、その女性客は鶴舞駅で下車しましたが、どんな状況で、どんな想いを抱いていたのかを知る由はありません。ただ、違和感と共にコロナ禍による現実の厳しさ・虚しさを覚えました。

この現実直面したとき、あなただったらどんな行動をとり、何を思いま

すか。車内では、「コロナ感染予防のため、マスク着用にご協力をお願いします。」というアナウンスが何回も流れました。女性が乗車してからも流れました。しかし、女性が慌てた素振りをする、申し訳なさそうな表情をする、とは、携帯に目を落としていたことから見受けられません。急いでいてマスクを忘れ、アナウンスも流れたことで顔を上げられなかったと推し量ることもできます。逆に、「私は大丈夫。罹患しても軽症で済むだろう。」といった考えのものと行動であったとしたら、甘すぎる、現状から捉えらる電車という密閉された空間の中では、常識を疑われてもやむなしと捉えられます。

一方、移動した乗車客はどうでしょう。マスクをしていないという感染リスクの高い状況が自身の近くにあれば、それを回避しないと、という防衛本能が働くことはよくわかります。その裏には、自身のことだけでなく、家族や職場等大切な人のことまで思いを巡らせることもあり、避けた、逃げたという一見差別的に見られる行為も単純に否定することはできません。

コロナ禍によるこの現実は一端です。ただ、感染者数の増加、高止まりという事実だけでなく、日常の中の人間関係の希薄さ、ぎすぎすとした人間関係等、コロナ禍が例え収束したとしても、その後に影響を与えるような事態が残るような気がしてなりません。

そうならないようにするために、できること、できないことの判別をしつかりとして、できることに全力で向かうこと、主体性を発揮して自身・集団の高まりを目指すことです。

さあ、二学期の始まりです。